

B. ラッセルの政治思想

野 村 博

1. はじめに

1872年5月18日に生まれた Bertrand Arthur William Russell は、公私ともに波瀾に富んだ生涯を1970年2月2日満97歳で閉じた。

ほとんど一世に近しい人生行路において、「純一無雑を猛烈に要求する極度に複雑なパーソナリティ」⁽¹⁾ の持ち主であった Russell は、Alan Wood のいわゆる「情熱的にものを信じる人間になりたかったがために情熱的な懷疑論者」⁽²⁾ として、宇宙における人間の地位ならびに人間存在のあり方について、あらゆる学問の領域にわたり哲学的な検討と省察を加えてきた不屈の哲人である。次々と世に問うてきた彼のかず多くの業績は、私たちをして瞠目させるのに余りあるが、そのなかでも政治社会問題に関して表明してきた彼の見解は、痛烈な機知に富む洞察力の鋭さのゆえに、人類の将来と政治の趨勢について私たちに教示するところが多いのである。

ところで、Russell の多方面にわたる哲学的思索のうち、彼の政治・社会思想の根底にあると考えられる倫理観については、すでに別の拙論において私見を述べてきたので⁽³⁾、今この小論において彼の政治思想の基調ともいべきものを考察してみたいと思う。しかし、かず多い彼の業績のうち過半数の労作が、多少なりとも政治思想に関するものであって、これらをすべて網羅的に取り扱うゆとりは、残念ながら今の私にはない。

そこで、さしあたって Russell が1950年ノーベル文学賞を受賞した際にストックホルムで行なった格調の高い記念講演 “Politically Important Desires” を中心にし、さらに晩年のやや体系的にまとめた実践哲学上の最大の著作 “Human Society in Ethics and Politics” (1954) の Part Two : The Conflict of Passions —— その一章にノーベル文学賞受賞記念講演も含まれているが、——⁽⁴⁾を視座にして、その他若干の論文・著書を手がかりにしながら彼の政治思想の基調に流れているものを究明していきたいと思う。

2. 『政治的に重要な欲望』

1950年、Russell が78歳の折り Nobel Prize for Literature Acceptance Speech として行なった講演 “Politically Important Desires” (『政治的に重要な欲望』) は、政治や政治論

についての論議を有効適切なものにするためには、人間本性に関する心理学的考察をじゅうぶん行なわなければならない、といういわば警鐘の金字塔である。

「政治を科学的なものにすべきであるならば、そしてまた施策の結果をいつも意想外ということにしたいのであるならば、政治的にものを考える場合に人間行動の源泉にまでもっと深く入り込むことが、ぜひとも肝要である。」⁽⁵⁾

およそ人間の活動は、Russell によれば、すべて欲望ないし衝動によって駆り立てられるものである。したがって、人が道徳的義務の意識から行為をするといわれる場合でも、義務を果たそうと欲求しない限り、義務の意識はその人に対して何ら支配力をもたないのであるから、道徳的義務のために欲望に抵抗することは可能であると主張する真面目なモラリストたちの理論は、Russell にとって謬見にほかならない。ある人の行動を予測するためには、その人の物質的におかれた環境だけでなく、さらにまた、否むしろ主として、その人の欲望の全体系と欲望のもつ相関的な力とを知ることが必要不可欠なのである。

ところで、人間の抱く欲望のなかには、極めて力強いけれども政治的には大して重要な意味をもっていないものもあるが、Russell は、政治的に重要な欲望を一次的な群と二次的な群とに分類する。一次的な群に属する欲望とは、衣・食・住という生きるうえで欠かせないものに対する欲望であって、この欲望が政治上の重大な事件の主要な原因であることは、今も昔も変わらない事実であろう。

衣・食・住に対する欲望のもつ政治的な重要性については、あまりにも明白であって多言を必要としないし、Russell の念頭にあって政治的に重要だと考えられた欲望は、むしろ二次的な群に属する欲望なのである。

「人間は、一つの極めて重要な点において他の動物とは異なっているのであって、それは、人間には、いわば無限で決してじゅうぶんに満足させることはできず・天国においてさえ人間を不安で休ませないでおく・欲望がある、ということである。」⁽⁶⁾

このような無限で飽くことを知らない二次的な群の欲望として、Russell は、まず *Acquisitiveness*(利欲心)、*Rivalry*(敵愾心)、*Vanity*(虚栄心) および *Love of Power*(権勢欲) の四つを基本的なものとして挙げている。⁽⁷⁾

利欲心(物欲)は、Russell によれば、生活上必要なものに対する欲望と、欠乏ないし不足に対する懸念との結合に起源を有する行動の動機である。利欲心は、精神分析的にどういわれようとも、特に権力者たちの間では大きな動機の一つであることは否定できないところであって、人はいかにものを多く獲得しようとも、さらに多く獲得しようと欲するのが常なのである。「飽満はいつも人から身をかわして捕えることのできない夢のようなものである。」⁽⁸⁾

利欲心は、資本主義制度の推進力ではあるけれど、しかし Russell によれば、飢餓を征服してもなお生き残っている動機のうちで最も力強いものではない。敵愾心(競争心)の方が利欲心よりはるかに強い動機である。「もしも利欲心の方がいつでも敵愾心よりも強ければ、世界

B. ラッセルの政治思想

は現にあるよりももっと仕合わせな所となっていることだろう。しかし実際は、自国の困苦欠乏によって敵国を完全に破滅させることが保証されれば、多くの人々は快く自国の困苦欠乏に立ち向かうのである。』⁽⁹⁾

虚栄心は、すこぶる巨大な力をもった動機である。子どもは、たえず奇異な仕草をしては「ほら、見てご覧！」(“Look at me.”)と言っているが、この「ほら、見てご覧！」こそ、Russellによれば、人間精神の最も基本的な欲望の一つである。虚栄心は、人を笑わせるようなお道化た言語や動作から死後の名声を残そうとする行為にいたるまで、数えきれないほどの形をとるものであるが、この「虚栄心について厄介な一つのことは、虚栄心は虚栄心を養う自慢の種とともに大きくなる、ということである。』⁽¹⁰⁾ 三歳の童子から顰めっ面をすれば世間の人が震えあがる権力者にいたるまで、人間生活のいたるところで虚栄心のもつ影響力をいくら強調しても強調しすぎることとはまずないのである。

しかし、Russellによれば、利欲心・敵愾心・虚栄心よりもはるかに重要な欲望に、権勢欲(権力愛)がある。権勢欲は、虚栄心に極めて類似しているが、決して同じものではない。虚栄心を満足させるために必要なものは、栄光であって、権力がなくても栄光をもつことは容易である。権力よりもむしろ栄光を好む人の方が世のなかには多いが、世事万端の成りゆきに対して影響力を大きく及ぼすのは、栄光よりも権力を好む人々なのである。権勢欲は、貪欲で飽くことを知らない点では虚栄心に似ていて、全知全能の神以外は、この欲望を完全に満足させることはできないのである。しかも、「この権勢欲は、特に精力的な人々に見られる悪徳であるから、権勢欲のもつ行動の動機としての効率性は、その発動する頻度数に比べてまったく均り合いを失うほどに大きいのである。』⁽¹¹⁾ 権勢欲は、権力を経験するとともにますます増加するものであるうに、したくないことを人々にさせることで権力は示されるから、権勢欲で動かされる人は、人々に快楽を許すよりもむしろ苦痛を与えがちなものである。

こういったことこそ、権勢欲をして非常に危険な動機とするものなのである。とはいうもののRussellにとって、権勢欲そのものがまったく動機として非難されるべきものであるというのではない。知識の追求や科学技術の進歩も、主として権勢欲によって動かされているのであって、権勢欲を動機とすることによって人が社会的に有用な行動に導かれるか有害な行動に導かれるかは、その人の力量と社会制度にかかっているのである。そしてRussellによれば、いわゆる政界の黒幕や東洋諸国の宦官のような極めて純粋な範例を除いて、権勢欲は通常栄光を求める虚栄心などの他の欲望と結びついているのである。

以上で、政治的に重要な欲望のうち二次的な群に属するものを考察してきたRussellは、ある意味においては上述の欲望ほど基本的でないが、それでも少なからぬ重要性をもつ他のいくつかの動機について論及する。

その一つは、Love of Excitement(興奮欲)であって、Russellによると、人間は退屈に対する能力で獣類よりも優越性を示しているのであって、退屈からの逃走がほとんどあらゆる人

間の実に力強い欲望の一つであることは、経験によって示されているところである。酒・煙草・賭博・戦争などは、人々に刺激を与えることによって興奮欲を満足させるものである。この興奮欲の根本原因が何であるかについて、Russell は、私たち人間の精神構造が狩猟をして生きた段階に向いているのではないかと言う。すなわち、狩猟時代の原始的な人間にとっては、生存する営みで精一杯であって、退屈をする時間も精力もありえなかった。しかし農耕生活に入ると、「人間生活のむなしさを思案し、神話や自然哲学の体系を創案し、ヴァルハラ宮殿の猪を永久に狩っている来世のことを夢想する余暇」⁽¹²⁾ ができたのであった。「私たちの精神構造は、極めて厳しい肉体労働の生活に向いている」⁽¹³⁾ のに、余暇ができたために、退屈を感じ興奮欲を満たそうとするようになったのである。人間の好戦性も、興奮欲に根ざすものであるから、「興奮欲を生み出す肉体的な使用しない精力によって無害な捌け口を確保するため」⁽¹⁴⁾ 戦争以外の他の手段を見つけることが、人類の生存にとって必要不可欠なのである。

このような興奮欲のための捌け口について、Russell によれば、社会改革家たちは従来あまりにも考慮してこなかったし、モラリストたちは捌け口を許容することをすべて罪惡視してきたが、興奮欲は極めて深い欲望であるから無害で建設的な捌け口を用意するための苦勞がなされなければならないのである。「突然の発見や発明の瞬間ほど、この世で人を興奮させるものはない。そして、時々考えられるよりはるかに多くの人々が、こういった瞬間を経験することができるのである。」⁽¹⁵⁾

さて、そこで Russell は、「他の多くの政治的な動機と織り交ざって、人間が遺憾ながら陥りやすい二つの密接に関係した激情」⁽¹⁶⁾ すなわち Fear (恐怖) と Hate (憎悪) について述べていく。

人が恐れるものを憎むのは正常であり、憎むものを恐れることもしばしば起こることである。原始人の間では、見慣れないものならすべて恐れ憎むのが彼らの常習なのである。原始人にはもともと極めて小さな自分たちの群があり、群の内部では特に敵意を抱く理由がなければすべて友なのである。しかし、他の群は潜在的ないし現実的な敵であって、他の群の一員が偶然に迷い込んできた場合には必ず殺されるのである。全体としてかけ離れた群は、事情の如何によって忌避されたり戦われたりする。Russell によれば、「このような原始的なメカニズムこそ、今もなお外国人に対する私たちの本能的な反応を支配しているもののなのである。」⁽¹⁷⁾

文明人でまったく旅行の経験のない人は、ちょうど野蕃人が他の群の成員を見るようにすべての外人を眺めるだろう。しかし、旅行をした人や国際政治を研究した人ならば、自分の群を繁栄させようとするれば他の群とある程度混交しなければならないことがわかるはずである。「人は自分の敵を憎む人々を愛するものである。もし敵がまったくいなければ、人が愛する人々は極めてかず少なくなることだろう。」⁽¹⁸⁾ しかし、こんなことは、ただ他の人間に対する態度とだけかかわっている限り当てはまることなのである。土地が人間に乏しい生計の資を与えるにも出ししづるがゆえに、土地を敵と考えることもできるし、母なる自然を敵と見なして、人

B. ラッセルの政治思想

間生活を母なる自然を征服する闘争であると考えられることもできるだろう。こんなふうになんが人生を眺めたら、全人類の協力は容易になることだろう。そして、「もし学校・新聞・政治家がこの目的に専心したならば、人々はこんなふうになんが人生を眺める気に容易にならされたことだろう。しかし、学校は愛国心を教えようとし、新聞は興奮を掻きたてようとし、政治家は再選されようとする。したがって、これら三者のうちのどれ一つとして、人類を相互自殺から救うために何もすることができないのである。」⁽¹⁹⁾

Russell によれば、恐怖に対処するには二つの方法がある。一つは、外的な危険を減少させることであり、もう一つは、ストア主義的忍耐力を養成することである。恐怖の征服は、極めて重要なことであって、恐怖はそれ自体下劣なものであり、容易に妄想となり、恐怖の対象に対して憎悪を生じ、過度の残忍さに直進する。「安心感ほど人間に情け深い影響を与えるものは他にないのである。」⁽²⁰⁾ 戦争の恐怖を除去するような国際的な制度が設立されたならば、一般の人々の日常の物の考え方を改善することは、極めて迅速に途方もなく大幅に行なわれることだろう。しかし、現在は原子爆弾や細菌爆弾のような恐怖が、世界に暗い影を投げている。このような事態を改善すべきであるならば、まず最初に行なうべき非常に重要な第一歩は、恐怖を減少させる方途を見つけ出すことである。

現在の世界は、敵対したイデオロギーの葛藤に取りつかれて悩んでいるが、明らかにこの葛藤の原因の一つは、自分たちのイデオロギーが勝利をおさめ他のイデオロギーが敗北するのを願う欲望にある。しかし、Russell によれば、この葛藤の基本的な動機は、イデオロギーと大して関係はないのである。つまり、「イデオロギーは、単に人々を分けて群にする一つの方法にすぎないのであって、イデオロギーにかかわる激情は、単に敵対する集団の間にいつでも生じる激情にすぎないのである。」⁽²¹⁾

以上のように、政治的に重要な欲望について述べてきた Russell は、ただ悪しき動機ないし精々倫理的に中性的であるような動機しか考慮に入れてこなかったと人々に感じられるかも知れないが、論及されてきた動機の方が通常は利他的な動機よりはるかに力強いことを Russell は気づかっているのであって、利他的な動機が存在し、場合によっては効果的でありうることを、彼は否定しているのではない。

Sympathy (共感) が純粋の動機であって、ある時ある人が他人の苦しんでいるのを見て不快の念を抱かされることがあるのを、Russell とて疑う余地がないのである。むしろ、「共感こそ、過去百年にわたる人道主義的な多くの前進を生じさせてきたものである。」⁽²²⁾ とさえ言うのである。私たちは精神異常者が虐待される話を耳にすると衝撃を与えられるし、今日では虐待されることのない保護収容所が実に多く存在する。西洋諸国の囚人たちは、拷問されるとは思われないし、また拷問されれば、その事実が明るみに出たときには抗議の声が叫ばれるのである。孤児を「オリヴァ・トゥイスト」のように扱うことは是認されないし、プロテスタントの諸国では、動物に対する残酷な行為も非難されるのである。すべてこのようにして、共

感は政治的にも効果的なものになってきたのである。戦争の恐怖が除去されれば、共感の効力は、さらに大きいものとなるだろう。かくて Russell は、「おそらく人類の将来に対する最善の希望は、共感の範囲と強度を増大させる方法がいずれ見つけ出されるだろう、ということである。」⁽²³⁾ と断ずるのである。

『政治的に重要な欲望』という講演を終えるにあたって、Russell は次のようにこの論議を要約する。政治は、個人よりもむしろ群集にかかわるものである。したがって、政治において重要な激情は、ある群集のさまざまな成員が等しく感じることが出来る激情である。政治組織を築くにあたって基礎にしなければならない広い本能的なメカニズムは、群集の内部における協力と、他の群集に対する敵意とのメカニズムである。

「群集の内部における協力は、決して完全なものではない。成員のなかには順応しない、語源的な意味において 'egregious' (=out of the flock) な、すなわち群の外にいるものがある。これらの成員は、普通の水準より以下に下がっているか、以上に上がっているか、いずれかの人々である。すなわち、白痴・罪人・予言者および発見者である。賢明な群集は、平均以上の人々の奇抜な風変わりさを寛大に取り扱い、平均以下の人々を最小限の残忍さをもって遇するようになるだろう。

「他の群集に対する関係については、私利私欲と本能との間に葛藤を現代技術が生んできたのである。昔は二つの部族が武力に訴えたとき、一方の部族は他方の部族を皆殺しにして、その領土を併合した。勝利者の観点からすれば、この行動の全体はまったく満足なものであった。殺人は少しも高価ではなく、興奮も快適であった。このような状況で戦争が存続したということは、何ら驚くべきことではないのである。不幸にして現代の私たちにも、戦争の具体的な行動はすっかり変化してしまったのにもかかわらず、このような原始的な戦闘にふさわしい感情がなお残っているのである。現代の戦争で敵を殺すことは、極めて高価な行動である。……財政的な観点からいっても、現代の戦争がよい仕事でないことは明白である。私たちは両世界大戦に勝利をおさめたけれど、戦争がおこっていなければ、現在をはるかに豊かになっていることだろう。

「少数の聖者の場合は別として、もし人々が、私利私欲によって実際は動かされていないけれど、私利私欲によって動かされるとすれば、人類全体は協力するようになることだろう。これ以上に多くの戦争も陸軍も海軍も原子爆弾も存在しなくなるだろう。A国民がB国民に対し、また逆にB国民がA国民に対し、それぞれ相互に偏見を抱かせようとして雇用する多くの宣伝者たちもいなくなることだろう。外国の書物や思想が、いかに卓越したものであろうとも、入ってくるのを妨げるために多くの税関の役人などもおかなくなるだろう。……このようなことはすべて、隣人の不幸を欲するのと同様に熱烈に自分たちの幸福を人々が欲するならば、極めて速やかに訪れるようになるだろう。しかし、こんなユートピア的夢想はいったい何の役に立つのか、と言われるだろう。モラリストたちは、私たちが完全に利己的にならないよ

B. ラッセルの政治思想

うに配慮するだろうし、私たちが利己的になるまでは至福千年期も不可能であろう。

「私は皮肉をこめた言い方のところで、この講演を終わりにするように思われたくはない。私は、利己心にまさるよいものがある、それを成就している人々がいることを否定はしない。しかし私は、一方では政治が関係するような多くの人々が利己心を超越することができる場合は少ない、と主張するが、その反面では多くの人々が利己心——もし利己心を啓発された私利私欲と解するならば——より以下になる状況が極めて多く存在すると主張するのである。

「そして、人々が私利私欲より以下になる場合には、人々が理想主義的な動機から行動していると確信している場合がほとんどなのである。理想主義として世間に通用しているものの多くは、偽装された憎悪あるいは偽装された権勢欲である。高尚な動機である一見して思われるものによって多くの人々が動かされているのを見るとき、表面の下を見てこれらの動機を効果的にしているものは何であるのかを尋ねた方がよい。見かけの高尚さによって欺かれることは極めてやさしいからこそ、私が企ててきたような心理学的研究をする価値があるのである。」⁽²⁴⁾

このように要約的に述べてきたRussellは、次の結語でこのノーベル賞受賞記念講演を終えるのである。

「結論として私は、私の語ってきたことが正しければ、この世界を仕合わせにするのに必要な主要なものは知性である、と言いたい。そしてこれは、結局のところ、楽天的な結論である。というのは、知性は、すでに知られている教育方法によって育成することができるものであるから。」⁽²⁵⁾

政治的思考にとって人間本性に根ざす欲望の心理学的考察が必要不可欠であることを説くRussellは、このようにして、人類の平和的生存にとって知性の育成こそ至極肝要であると主張するのである。しかし、「何ゆえに人々は今までのところ、ただ少数のものしか享受することができず、ほとんどのものにとっては野生の動物の生活よりもはるかに不幸な生活を伴うような世界にするために、人々の知性を用いてきたのか。」⁽²⁶⁾——これこそ、検討しなければならない大きな問題である。

ここで私は、“Human Society in Ethics and Politics”(1954) (『人間社会——倫理と政治』)の第2部“The Conflict of Passions”(『激情の葛藤』)においてRussellの論ずるところを眺めていきたい。

3. 『激情の葛藤』

Russellによれば、人間が動物界において特異であるのは、激情と衝動の点においてではなく、知性と想像力という能力においてなのである。知性と想像力は、激情を根本的に変えることなしに激情に対して新しい捌け口を与えるものである。

ところでRussellにおいて、「激情とは、人々がどのような目的を追求するかを決定するも

のであり、知性とは、人々がその目的に対する手段を見つけ出すのを助けるものである。』⁽²⁷⁾
 激情の領域においても、意識的な目的を伴わない衝動と、意識的な目的を伴う欲望とは、しばしば見過ごされやすい区別であって、意識的な欲望のために衝動を抑えるべく知性は使われてきた。つまり、「衝動に対立するものとしての欲望が、知性のために動物の行動よりも人間の行動のはるか大部分を抑制しているのである。』⁽²⁸⁾

さて、知性には Russell によると主要な二つの形がある。一つは、記憶の派生物である Forethought (将来に対する思慮) であって、人間と動物の生活を根本的に異なったものにする重要な一つの原因である。農業や資本や教育などにしても、すべてこの Forethought に基づいているのであるが、戦争の防止・食糧供給の増加および人口の制限は、新しい種類の Forethought がなければ解決しない人類にとっての重大問題である。

もう一つの知性の形は、Skill (巧みな技術) であって、望ましい結果についての知識をもって、ある活動を行なえば生じてくるであろう結果をもたらすために活動を行なう熟練のことである。農業にしる動物の家畜化にしる武器の製造にしる、すべてこの Skill に依存したものである。

ところで、知性の増加、特に Skill の増加は、いったい人類の平均的な幸福を増進させてきたのか、それとも減少させてきたのか。——Russell はこのように問いを出して、次のように考えるのである。たとえば、あらゆる労力節約装置は、逆説的な言い方をすれば、労働時間を増加させ、しかもその労働に対して支払われる賃金を減少させてきた。このような不幸な結果は、いたるところで見られる権力の不公正な配分に基づくのである。したがって、社会全体をとおして権力をいっそう平等に配分することこそ、悪に対する唯一の救済法なのである。

また Skill によって与えられた偉大な恩恵の一つに、疾病の減少と平均寿命の増加があるが、Russell によれば、人口過剰を防止するという問題に知性が向けられてはじめて、この恩恵を知性は完全な祝福とすることができるのである。そもそも、知性が人類にとって祝福であったか呪詛であったか、私たちにはまだ知ることはできないのである。しかし、一つのことだけは明白である、と Russell は言う。「もし知性が呪詛であることが判明すれば、それは知性がじゅうぶんに知性的でなかったがためにすぎない。人間は動物の思慮のない幸福に戻ることはできない。人間に可能である幸福は、知性の助けによって獲得しなければならない。そして、もし達成しそこなうならば、それは人間に最も特有の性質が過剰なためではなく、まさに不足しているためにほかならないのである。』⁽²⁹⁾

しかしながら、人間の行動は、Forethought と Skill だけではなく、Russell によれば、さらに Imagination (想像力) によっても動物の行動と異なるのである。たしかに高等動物には、ある程度の想像力があるにちがいないが、動物の行動は、人間の行動のように想像力から由来するような広大な信念の体系によって支配されていないことは明らかである。

およそ人間が信じる信念には、科学的な研究に基づく証拠に依拠するものと、正しいと感じ

B. ラッセルの政治思想

るがゆえに信じる信念とがある。想像力によって誘発された信念も、魔術・儀式・神話・宗教となつて、科学的な知識にまで成長した熟練や観察と同じように人間生活に深い影響を及ぼしてきたことは否定できない事実である。しかし、観察や理性に基礎をもたない信念は、この信念を案出した人々の支配的な激情に対する指標であつて、人間の想像力は神話を発案することによって人間の偏見に調和するような宇宙を創造したりしてきた。つまり、外界の因果律の過程全体を私たち自身の感情の線に沿うて構築してきたのである。事の真相を見きわめ、人類を不幸に陥らせる迷信から脱却させるためには、私たちはもっと科学の助力によって救いを見つけ出さねばならないのである。

もし信念が信仰——すなわち「何ら証拠の存在しないものに対する信念」⁽³⁰⁾に基づいておれば、議論をいくら重ねても無駄であつて、迫害や教育の力によってしか、その信念を変えることは不可能なのである。「私たちは、証拠の代わりに情緒をおきたいときにだけ、ただ信仰について語るのである。そして、証拠の代わりに情緒をおくことは、異なった集団は異なった情緒を代置するから、闘争になりがちなのである。」⁽³¹⁾だから Russell にとって、「世界が必要とするものは、独断ではなく、何百万人も拷問は望ましくないという信念と結びついた科学的研究の態度なのである。」⁽³²⁾

このように科学的な知性と研究の態度の必要性を強調する Russell は、「もし人々が子どもっぽい賢明さの結果から逃れるべきであるならば、別々の集団の人々についてではなく、まさに人間としての人間について考えるようにならなければならない。」⁽³³⁾と主張するのである。そして、「あらゆる Skill の増大が、人間の幸福を減少させるのではなく増進させるべきであるならば、相関的に知恵の増加することが必要である。」⁽³⁴⁾知恵のない Skill は、私たちの不幸の原因である。「人類を救済する唯一のものは、協力であり、協力への第一歩は個人々々の心にある。自分自身の仕合わせを願うのは普通であるが、今日の技術的に統合された世界においては、自分自身の仕合わせを願う気持ちが他の人々の仕合わせを願う気持ちと結びつかなければ、必ずや徒勞になるのである。」⁽³⁵⁾

人間は、大地と星をちりばめた天の子であり、神と獣の結合であると言われている。しかし Russell にとっては、「人間を神と獣の混合物であると言うのは、獣にとってまず公平ではなさそうである。むしろ人間は、神と悪魔の混合物だと考えなければならない。どんな獣にしても、どんなヤフーにしても、ヒトラーやスターリンが犯した罪を犯すことはできないだろう。」⁽³⁶⁾人間にとって真実の幸福は、人間の神的な潜在能力を最高度に発展させる人々にしか可能ではないのである。そして、世界に安定した平和をもたらすためには、科学的精神、すなわち「証拠によつてものを判断し、証拠がないときには判断を中止する習慣」⁽³⁷⁾を流布させることによって、はじめて達成されるのである。

以上において、『激情の葛藤』をとおして Russell の見解を眺めてきたが、世界の平和と人類の生存にとって必要なものは、Russell にとって科学的な知性ないし精神の存在である。科

学的な知性ないし精神とは、独断ではなくて、証拠を求め、証拠により判断する能力、証拠のないときには判断を中止する習性のことである。したがって大切なことは、「何を信じるかではなく、いかに信じるかである。」⁽³⁸⁾

Russell は、“Human Society in Ethics and Politics” よりもすでにさきに “Philosophy and Politics” (1947) において、「自由主義的なものの見方の本質は、どんな意見が抱かれるかということではなく、どのように意見が抱かれるかということにある。すなわち、意見が独断的に抱かれるのではなくして、暫定的に抱かれるのである。しかも、新しい証拠がいついかなるときでもその意見を放棄させるようになることもあるという意識を伴って。」⁽³⁹⁾ と述べている。したがって、科学的な知性・精神とは、自由主義的なものの見方と言いかえることもできるだろう。「自由主義的な暫定性と寛容の再生によってはじめて、私たちの世界は生きながらえることができる。」⁽⁴⁰⁾ とも Russell は言うのである。

Russell にとって、「経験主義の認識論は、独断と懐疑の中間」⁽⁴¹⁾ であって、「経験主義的自由主義こそ、一方において自分の信念のために科学的証拠を要求し、他方においてあれこれの党派や信条の流行普及より以上に人類の幸福を欲する人によって採用されることができる唯一の哲学である。」⁽⁴²⁾ それでは、このような経験主義的自由主義の哲学的精神あるいは科学的知性は、どのようにして育成し流布すべきであらうか。私はここで Russell の教育観を少し眺めてみたいと思う。

4. 政治と教育

“The Reconciliation of Individuality and Citizenship” (1932) (『個人的存在と公民的存在の調和』) という論文で Russell は、政治によって教育に加えられる害悪は二つの源泉から主として生じると述べている。一つは、ある一党一派に偏した集団の利害が人類の利害よりもまえにおかれることであり、二つは、大衆にも官僚にもともに画一性をあまりにも強く欲する気持ちがあることである。⁽⁴³⁾

従来から教育にとっては、自分の国家や宗教や、富者や男性の側に立って、これらを偏愛するのが習慣であった。このような事態の結果、教育は異なった宗教間・階級間・国家間で権力闘争の具となってしまったのである。だから生徒は、生徒自身のために考えられるのではなく、新たな補充要員としてだけ考えられるようになるのである。いったい教育に関する限り国家がその利害を子どもの利害と大体同一にする可能性が存在するのだろうか。——このように尋ねて Russell は、国際的な権威の確立に基づいて大規模な戦争を解消するとともに、不正の自然の支持者となる迷信を除去することこそ、子どもをして国家や宗教などの犠牲に供するのを防止する先決事項であると論じるのである。

理想的な教育を妨げるもう一つの原因である画一性に対する強い願望は、生徒の個性を重視して教えることに熱心な教師よりも、権力の座と安易な優越性を享受する行政官的タイプの教

B. ラッセルの政治思想

師によって抱かれるものであって、困ったことに能率主義の現代社会では、教えるよりもむしろ支配するタイプの教師を大切にすることになってきている。画一性の危険と戦う場合には、支配することを受する教師、分類と統計を受する教師よりも、むしろ教えることを受する教師、実験的精神をもった教師を鼓舞激励することが極めて肝要なのである。

「実験的精神は、目下のところ大抵の管理者にとって相容れないものであるが、教育がもっと科学的であれば、実験的精神はもっと皆のものとなるだろう。科学的な国家においては、この実験的精神の成長があるからこそ、抜け道や例外の許容が得られるのだと考えなければならない。抜け道や例外がなければ、進歩も少なく多様性も不じゅうぶんになることだろう。」⁽⁴⁴⁾

なるほど人口密度の高い産業界においては、Russellによれば、個人の心理の働きも前時代よりもはるかに制御され、公民的・社会的協力の意識を多く必要とするであろうが、しかし、個人の判断や個人の創意をあまりにも大きく減少させるようなことがあってはならないのである。「個人の最も充実な発達と必要最小限度の社会的統合との結びつき」⁽⁴⁵⁾こそ、Russellの意見では政治論の中心問題であるが、個人の創意を無視ないし軽視するような政治は、Russellの最も蛇蝎すべきものであって、そのような政治に奉仕する実験的精神を欠落させた教育は、人類の生存と歴史の将来にとって大きな障害物にならざるをえないのである。

すでに1916年、Russellは“Principles of Social Reconstruction”（『社会改造の原理』）のなかの“Education”論において、もし子どもの権利が尊重されれば、政治的武器としての教育は存在しえないはずであると論じて、次のように述べているのである。「子どもの権利を尊重すれば、子どもが独立した意見を形成するのに必要な精神的習慣と知識とを与えるように子どもを教育しなければならない。しかし、政治制度としての教育は、一組の意見を不可避免的なものにするような方法で習慣を形成し知識を制限しようとするのである。」⁽⁴⁶⁾ 現実に実施されているほとんどすべての教育には、ある一党一派に偏した集団の政治的動機が含まれている。そして、他の集団との競争において自己の集団を強化する意図のもとに、無防備の子どもに対して歪曲・抑圧・示唆などの手段により教えこもうとする。しかし、「完全な確信は、それだけですでにこの確信をもっている人々の精神的進歩をすべて破壊するのにじゅうぶんなのである。」⁽⁴⁷⁾ そもそもRussellによれば、「教育は、ある特定の信条が真理であるという確信ではなく、真理に対する願望をこそ育成すべきもののなのである。」⁽⁴⁸⁾ 「軽信を教育することは、速い速度で精神的退廃にいたる。自由な研究の精神を生き生きとさせることによってはいじめて必要最小限度の進歩を達成することができるのである。」⁽⁴⁹⁾ ただ教師の知識を受動的に受け容れる習慣を身につけることは、後の人生を惨めなものとするばかりであって、それは人々に指導者を求めさせ、しかもどのような人が指導者になろうとも、指導者の地位におかれた人を盲目的に受け容れさせるようにするのである。

教育は、Russellによれば、本質的にいって子どもに対して精神的冒険に対する愛を喚起し触発するものでなければならない。私たちが生きている世界は、種々様々であり驚くばかりで

ある。最も簡単明瞭ように思われるものでも、考えれば考えるほどますます困難になってくるものもあるし、昔ならば発見することがまったく不可能と思われたかも知れないのに、非凡な才能と勤勉によって覆いを取り除かれてしまったものもある。思考の力、思考が征服しうる広大な領域、思考が想像力に対してもただぼんやりとしか暗示できないはるかに広大な領域が、日々反復される日常生活の範囲を越えて精神を旅行させる人々に対して、驚くばかりの豊富な材料を与え、ありふれた毎日の決まりきった日課のつまらない退屈さから逃走させるのであって、これにより人生のすべてが興味で満たされ、日常の平凡事という監獄の壁が取りこわされるのである。

精神的冒険の喜びは、まれにしか見られないものにちがいがなく、その真価を正しく認めることができる人は少数であって、そのような貴族的な幸福を普通の教育では考慮することができない、——あるいは人々は、このように言うかも知れない。これに対してRussellは、「否」と答えるのである。精神的冒険の喜びは、成長した男女よりも若者においてはもっとありふれたものなのである。子どもたちの間では、極めてありふれたものであって、振りをしたり空想したりする子ども時代から自然に育つものである。後年の人生においてこの精神的冒険の喜びがまれなのは、教育によってこの喜びを失わせようとしていろいろなことが行なわれるからにほかならない。人々は、地上のほかのものは何も恐れるものがないほどに、思考を恐れるのである。「思考は、倒壊的にして改革的であり、破壊的にして恐ろしいものである。思考は、特権や既存の制度や快適な習慣に対して情け容赦はしない。思考は、無政府的で無法であり、権威に対して無関心で、昔からじゅうぶん試練を経ている知恵なども意に介しない。思考は、地獄の奈落の底をのぞきこんでも恐れはしない。思考は、か弱い一点にしかすぎない人間が測り知れない深淵のような沈黙に囲まれているのをみる。けれども思考は、宇宙の宰主であるかのように不動で誇らしげに振る舞うのである。思考は、偉大で迅速で自由であって、世界の灯明にして人間の主たる栄光である。」⁽⁵⁰⁾

しかし、思考が少数者の特権ではなく、多くの人々の所有とならねばならないならば、私たちは恐怖を片付けてしまわなければならない。そこでRussellは言うのである。——「人々が大事にしてきた信念が幻想になりはしないだろうかという恐怖、人々が生きてこられた制度が有害なものになりはしないだろうかという恐怖、人々がみずから想像してきたよりも尊敬に値しないものになりはしないだろうかという恐怖、こういった恐怖こそ、人々を引き止め躊躇させるものである。労働者が財産について自由に考えるのではないだろうか。とすれば、私たち金持ちはどうなるのだろうか。若い男女は性について自由に考えるのではないだろうか。そうなれば、道徳はどうなるのだろうか。兵士たちは戦争について自由に考えるのではないだろうか。そのときには、軍紀はどうなるのだろうか。思考など追い払え！ 財産・道徳・戦争を危険にさらさないように、偏見の暗やみに戻れ！ 人間は思考が自由になるよりも、愚かで怠惰でふさぎ込んでいる方がはるかによい。人々は思考が自由であれば、私たちと同じようには

B. ラッセルの政治思想

考えないだろうから。何としても、この災害は忌避しなければならないのである。——思考に反対するものは、魂の無意識の奥底で、こんなふうに議論する。そして、彼らは教会で、学校で、大学でそのように行動するのである。』⁽⁵¹⁾

しかし、「恐怖に駆られている社会制度で、生命を促進するものはありえない。恐怖ではなくて希望こそ、人の世の出来事における創造的な原理なのである。人間を偉大にしてきたものはすべて、悪と考えられたものを回避しようとする戦いからではなく、善なるものを確保しようとする企てから生じてきたのである。現代の教育は、大いなる希望によって導かれることが滅多にないからこそ、偉大な結果を成就することも滅多にないのである。未来を創造する希望よりもむしろ過去を維持したいという願望が、若者の教育を支配する人々の心を占めているのである。教育は、死んだ事実を受動的に知ることを目指すべきではなく、私たちの努力が創造しようとしている未来の世界に向けられる活動をこそ目指すべきである。消滅したギリシアの美やルネッサンスを愛惜して憧憬することによってではなく、来たるべき社会や来たるべき時代に思考が達成する勝利、それに宇宙に対する人間の展望の視野がたえず拡大していく輝かしい未来像によって、教育は鼓舞されなければならない。このような精神で教育される人々は、生命と希望と喜びで満たされ、人間の努力が創造しうる栄光に対する信念をもって、過去よりも陰うつでない未来を人類にもたらすことに一役買うことができるのである。』⁽⁵²⁾

このようにして教育は、Russellにとって、一党一派に偏した集団の利害にかかわることなく、自由に飛翔する思考の精神的冒険の喜びを子どもに与え、来たるべき人類社会の輝かしい未来像を目ざして、創造的に活動する人間を形成するものでなければならない。かくしてこそ、そこには、多様性を認識し寛容の態度をもった自由主義的な暫定性を伴う実験的精神、つまりは科学的な知性が育成されるのである。社会を改造する政治の依って立つべき根幹は、このような科学的知性を育成する教育にこそ存在するのである。

5. 政治の理想

かず多いRussellの著書のなかにあって、1917年にただアメリカにおいてだけ出版され、その後約半世紀を経た1963年にはじめてイギリスで刊行されたものに“Political Ideals”『政治的理想』がある。Russellの哲学思想は、すでに別の拙論において述べたように、⁽⁵³⁾ 所与の歴史的現実に対して合理的な経験主義の態度で対処するRussellの知的な正直さのために、その観点が徐々に変化し発展してきているが、この“Political Ideals”は、Russellがみずからの所説が妥当性を失っていないと考えたからこそ、50年近い歳月を経てイギリス本国においても出版したのだろう。少なくとも私たちは、本書にRussellの政治的理想に関する考え方の萌芽、否むしろ核心を見い出すことができると思うのである。

ところで、本書のなかでRussellは、「政治的理想は、個人の生活にとっての理想に基づかなければならない。政治の目的は、個人々々の生活をできるだけ良くするようにすることでは

ければならない。政治家にとって、この世の中を構成しているさまざまな男や女や子どもの外にも上にも考えなければならないものは何一つ存在しないのである。政治の問題は、それぞれの人間ができるだけそれぞれ自分の生活を良くしていくようなやり方で、人間関係を調整することである。そして、この問題のために私たちは、個人の生活において何をよいと思うのか、よいと思う内容についてまず最初に考えてみる必要がある。」⁽⁵⁴⁾ と述べて、私たちは万人がすべて同様であることを欲しはしないし、あらゆる種類の人々を何らかの方法で似た人間にしてしまう原型ないし類型を造りたくはない、と書いている。

そして Russell は、「もし実現可能ならば、実現しなければならないのは、万人にとっての一つの理想ではなく、それぞれ一人々々の人間にとっての別々の理想である。」⁽⁵⁵⁾ と主張する。しかし、普遍的に妥当する性格をもった理想を詳細に立てることはできないけれど、Russell によれば、何が可能であるか、あるいは何が望ましいか、という可能なものや望ましいものに関して私たちが価値判断をするための指針として使用できる幅の広い原理は存在するのである。

Russell によれば、私たちは二種類の財（物）と、それに対応する二種類の衝動とを区別することができる。すなわち、個人が所有できる財と、万人が等しく分有できる財がある。前者は一般に物質的な財にあてはまり、後者は精神的な財に適合する。ところで、この二種類の財に対応して、二種類の衝動、すなわち所有的衝動と創造的ないし建設的衝動がある。所有的衝動は、共有できない私的な財を獲得したり保有したりすることを目ざすから、財産獲得の衝動に集中する。これに反して創造的衝動は、内密にしたり私有したりすることがまったくないような種類の財を世の中にもたらすか誰にも使用できるようにするか、いずれかをねらうのである。

さて、そこで Russell は、「最善の生活とは創造的衝動が最大の役を果たし、所有的衝動が最小の役しか果たさない生活である。」⁽⁵⁶⁾ という。所有的衝動は、競争・羨望・支配・残忍、ならびにこの世にはびこるほとんどすべての道徳的悪を生じさせ、財を力で略奪させるようになるのである。物質的な財は、力で奪われて、略奪者によって享有されることができる。しかし精神的な財は、このように力で略奪されることはありえない。力が有効なのは物質的な財に関してだけであるから、力を信じる人々は、その思考と欲望が物質的な財に夢中になっている人々なのである。

所有的衝動は、強く烈しいときには、全然創造的でなければならない人間の活動に悪い影響を与えるが、およそ創造的衝動は、そもそも所有的衝動によって暗い影を与えられるものである。だから、力を用いて他人に対して加えうる害悪と力によって獲得できる物質的な財の無価値さとを理解している人々は、他人の自由を大いに尊重し、他人を束縛したり拘束したりすることなく、他人を批判するのはのろいが、同情するのは迅速であつて、すべての人間をある種のやさしさをもって遇するのである。つまり創造的衝動を大切にする人は、他の人々に対して

B. ラッセルの政治思想

人間尊重の深い衝動で交じわるのである。

したがって、「所有本能を圧倒し吸収する強い創造的衝動、他人に対する尊重の念、および自分自身のなかにある基本的な創造的衝動に対する尊敬の気持ち」⁽⁵⁷⁾ この三つのものこそ、Russell によれば、個人々々に望まれるものである。よい生活には、ある種の自尊心すなわち生まれながらの誇りが必要であって、もし人がそこなわれずに全きままでありたいければ、内面的な敗北感を抱いてはならず、どのような内面的または外面的な障害に出くわそうとも、自分のうちにある最善のものによって生きる勇気と希望と意志を感じなければならない。そして、自尊心が人間自身の力のなかにある限り、所有的であるよりもむしろ創造的である衝動、他人に対する尊重の念、自分自身のなかにある基本的な創造的衝動に対する尊敬の気持ち——この三つが自尊心にあれば、人間生活はその最善の可能性を実現することができるであろう。

このように論じてきて Russell は、政治制度や社会制度は、個人に対して与える幸福ないし害悪によってその良否を判断すべきであると言う。つまり、制度が所有欲よりも創造性を助長しているか、人間同士の間に尊重の念を具体化したり促進したりしているか、自尊心を人々に保持させているか、——これらによって、制度の良否を判断すべきなのである。したがって、「安全保障と自由は、よい政治制度にとっての消極的な条件にしかすぎない。安全保障と自由とが得られたときには、積極的な条件、すなわち創造的精力の助長がさらに必要なのである。安全保障だけならば、ひとりよがりの停滞した社会を生じるかも知れない。安全保障は、生活の冒険と関心や絶えず新たなよりよいものへと向かう活動を生き生きとさせつづけるために、対応物として創造性を要求するのである。人間の制度に何らかの最終的な目標はまったくありえない。最善の制度とは、他のさらにより制度に向かって前進するのを最も奨励する制度である。努力と変化がなければ、人間生活は幸福のままであることはできない。私たちが望まねばならないものは、完成されたユートピアではなくて、想像力と希望とが生き生きと活発であるような世界なのである。」⁽⁵⁸⁾

Russell にとって「幸福な生活とは、活動力のある生活でなければならない。もし幸福な生活がさらに有用な生活でもあるためには、その活動力はできるだけ創造的であるべきであって、ただ略奪的や防御的であってはならないのである。」⁽⁵⁹⁾ 現代生活には、巨大な組織が不可避免的な要素であるが、個人の創意を最大限に生かす余地が至極大切なのであって、そのためにこそあらゆる組織の統御を民主的にすることが必要なのである。民主主義は、個人の自由と組織の統制との抵触をできるだけ減少させようとして工夫されたものであるが、もし大幅な権限の委譲が民主主義に伴わなければ、民主主義も適切な工夫とはまったくならないのである。権限委譲は、下位の組織やその成員である個人に創意を働かせ創造的に活動させる余地を与えるものだからである。

したがって、およそ立派な政治制度ならば、Russell によれば、「一つには、創造的衝動への機会を増大し、創造的衝動を強化するように教育を行なうことによって、そして二つには、所

有的本能への捌け口を減少させることによって、力と支配に向かう衝動を弱めるのである。』⁽⁶⁰⁾
かくて政治の理想は、Russell において、まず個人の生活にとっての理想に立脚すべきであり、個人の理想は人それぞれにとって千差万別でなければならないが、他人との共有を本来的に許さない私的な財を獲得・保持しようとする所有的衝動に根ざすものであってはならない。精神的な財をねらう創造的衝動こそ、多種多様な個人の理想に普遍的に妥当する原理であって、個人にとって最善の生活とは、この創造的衝動が最大限に発揮され、所有的衝動が最小限にしか発動しない生活である。したがって、個人の理想の実現に役立つべき政治制度は、ただ単に個人の生活の安全と自由を守るだけではなく、さらに個人の創造的な精力の助長を目ざす積極的条件を具備したものでなければならない。

これを要するに、Russell において政治の理想は、個人の創造的衝動への機会を増大し、所有的衝動への捌け口を減少させることによって、個人の理想である創造的衝動を最大限に発揮し所有的衝動を最小限に発動するような最善の生活を、個人が送るように諸制度をとおして条件整備することにほかならないのである。

「物質的所有は、通常、すべての寛大で創造的な衝動を排除して、事実上あるいは欲望のなかで、私たちのものの見方を支配する。所有欲——持って占有したいという激情——こそ、戦争の究極的な源泉であり、政治世界を苦悩させているあらゆる悪の基礎である。この所有欲の激情の力と、この力が私たちの日常生活に及ぼしている影響とを減少させることによって、はじめて新しい諸制度が人類に対し永久の恩恵をもたらすことができるのである。』⁽⁶¹⁾

6. ま と め と し て

以上において私は、Russell の政治思想の基調に流れていると思われるものを考察してきたが、今ここで上述してきたことを簡単に要約してみよう。

政治を科学的なものにしなければならないならば、私たちの政治的思考には、人間行動の源泉にまで立ち入って人間本性の心理学的研究をすることが必要欠くことのできないものである、と Russell は考える。およそ人間の活動は、すべて欲望の表現であるから、政治現象も欲望とのかかわりから考察しなければならない。ところで、政治的に重要な欲望には、衣・食・住に関する一次的な欲望のほかに、無限で飽くことを知らない二次的な欲望があって、むしろこの二次的な欲望こそ、政治行動の源泉として基本的な推進力をもっているものなのである。

そこで Russell は、二次的な欲望として、利欲心・敵愾心・虚栄心・権勢欲の四つを挙げて、(Robert E. Egner の言葉を借りると)「はたして人間の貪欲飽くなき欲望が、人間の究極的な愚行の碑銘とならなければならないのか?」⁽⁶²⁾について、究明していく。

利欲心は、生活に必要なものに対する欲望と欠乏ないし不足しないかという懸念とが結合して生じる行動の動機であるが、飽満が人間にとっての一つの夢である限り、利欲心も留まると

B. ラッセルの政治思想

ころを知らない無限の欲望である。

敵愾心は、利欲心よりはるかに強い動機であって、たとえば敵対国を壊滅させるまで自国の困苦欠乏に多くの人をして耐えるようにさせるのも、この敵愾心のなせる業である。

虚栄心は、莫大な力をもった動機であって、これを満足させるために必要なものは栄光であるが、三歳の童子から世の権力者にいたるまで人間生活のありとあらゆるところで大きな影響力をもっているのである。

権勢欲は、貪欲で飽くことを知らない点では虚栄心に似ているが、特に精力的な人々の悪徳であって、栄光よりも権力を望む人々の方が世事万端の成りゆきに対して大きな影響力を及ぼすものであるだけに、非常に危険な動機となるのである。

さらに Russell は、四つの基本的な欲望のほかに、政治的に少なからぬ重要性をもった他の欲望について論及する。その一つは、興奮欲であって、退屈からの逃走は人間の力強い欲望である。この興奮欲に根ざす人間の好戦性は、興奮欲を生み出す精力にとって無害な捌け口を確保するための手段を戦争よりほかに見つけ出さなければならないのである。

恐怖と憎悪は、他のいろいろな政治的動機と織り交ざって人間が陥りやすい激情であるが、自分の所属する群以外の見慣れないものをすべて敵対者と見なして恐れ憎む原始的な心理のメカニズムは、現代の文明社会にもなお存在しているのであって、恐怖心を征服し人々に安心感を与えるために、いろいろな方途が講じられなければならないのである。

政治的に重要な欲望として悪しき動機ばかりを論じてきた Russell は、利他的な動機が存在を否定しているのではなく、ただ利他的な動機の方がはるかに弱いから、おのずから悪しき動機に論点がおかれることになったのである。利他的な動機として共感、過去の歴史においても人道主義的な前進をいろいろともたらしたものであって、共感の範囲と強度を増大させることこそ、人類の将来に対して託された最善の希望なのである。

Russell によれば、政治は個人よりも群集にかかわるものであって、群集を構成する多種多様な成員が等しく感じられる激情こそ、政治的に重要な激情である。そして政治組織の基礎にすべき本能的な心理のメカニズムは、群集内における協力と他の群集に対する敵意である。群集内における協力は決して完全なものではないが、それにもまして他の群集に対する敵意は、いまだに強く残存して、人類を不幸にしているのである。今日こそ本能ではなく、啓発された私利私欲に基づいて、全人類が協力しなければならないときなのである。理想主義的な動機に基づいていると思われる行動も、憎悪や権勢欲が偽装されている場合が多いからこそ、人間本性に根ざす欲望について心理学的研究をする価値が存在するのである。それはともかく、啓発された私利私欲に基づいて全人類が協力し世界を仕合わせにするために必要欠くべからざるものは、知性——既知の教育方法により育成できるはずの知性なのである。

ところで、知性とは、Russell によれば、激情が人々の追求する目的を決定するものであるのに対し、決定された目的にとっての手段を見つけ出す援助をするものである。知性には、将

来に対する思慮と巧みな技術という二つの主要な形があるが、はたして今日まで知性は人類にとって祝福であったのだろうか。もし呪詛であったとすれば、知性がじゅうぶん知性的でなかったからにほかならないのである。

人間は、知性だけではなく想像力によっても動物とは異なるのであるが、科学的な証拠に基づく信念ではなくて想像力により誘発された信念で行動することが、人類を不幸に陥らせることも多いのである。したがって、世界にとって必要なものは、独断ではなく、科学的研究の態度である。世界に安定した平和をもたらすための科学的精神とは、証拠によってものを判断し、証拠のないときには判断を中止する習性であって、言葉をかえていえば自由主義的な暫定性と寛容の精神である。

知性といい、科学的精神といい、自由主義的なものの見方といっても、これを育成するものは、教育にほかならない。ところが、従来の教育は、Russellによれば、一党一派に偏した集団の利害のために人類の利害が無視され、画一性が重んじられるために実験的精神が疎まれて、子どもの精神的冒険に対する愛が抑圧されてきたのである。「教育は、ある特定の信条が真理であるという確信を育成すべきものではなく、真理に対する願望をこそ育成すべきものである。」教育の本質は、自由に飛翔する思考の喜びを子どもに与え、人類社会の輝かしい未来像を目ざして、創造的に活動する人間を形成することにある。かくてRussellにおいて、社会改造のための政治の根本は、教育に存在するのである。

いったい政治の理想とは何か。Russellによれば、政治の理想は、多種多様であるべき個人の理想に立脚すべきであるが、普遍的に妥当する原理をもった個人の理想は、所有的衝動が最小限にしか発動せず、創造的衝動が最大限に発揮されるような最善の生活でなければならない。したがって、政治は、このような個人にとっての最善の生活が送れるように、消極的には個人の生活の安全と自由を確保し、さらに積極的には個人の創造的衝動への機会を増大させるようにすることこそ、その理想にほかならないのである。

「政治上の理論や趨勢について、Russellほど鋭敏な洞察力と機敏な観察力を示してきた専門の哲学者は、かず少ないのである。彼のノーベル賞受賞記念講演の題目は、『政治的に重要な欲望』であって、これは、ニュー・ヨーク・タイムズ紙が講評したように、『洞察力があると同様に機知に富んだ』ものである。』⁽⁶³⁾

これは、“The Basic Writings of Bertrand Russell”を編集した R. E. Egner and L.E. Denonnが、その“Part XI The Philosopher of Politics”のタイトル・ページに書いた評釈の一部であるが、この講演を中心にし、その他いくつかの論文・著書をとおして、私はRussellの政治思想の底に流れているものを考察してきた。

まことにRussellは、機知の痛烈さと洞察力の鋭さをもって政治の本質に迫り、人類の課題と真正面から取り組んで、これを科学的に客観的に論じてきたのである。その腹藏のない率直

B. ラッセルの政治思想

な見解は、時として常識的に思われ、時として非常識に思われるかも知れないが、Robert E. Egnerが“Bertrand Russell's Best”の序文で述べているように、「Francis Bacon から続いているイギリス哲学の伝統の明らかな継承者として、Lord Russell は、常識と非常識の最も偉大な結合者だった」⁽⁶⁴⁾ のである。常識的に思われる Russell の見解は、私たちをして事の真相を再確認した思いにさせられるが、非常識に思われる見解は、独断的な偏見ではなく客観的な真理を私たちが追求する情熱をいよいよ掻き立てられるのである。

R. E. Egner も言うように、「Lord Russell が書いた極めていろいろな社会問題に関する意見は、表明された見解に教皇のような独断的な確実性を要求しないという意味において、いつも科学的であった。」⁽⁶⁵⁾ 独断こそ、Russell が絶えずいたところで繰り返し繰り返し述べてきた排斥すべき人類の敵である。世界に安定した平和をもたらし、人類が生きながらえていくためには、科学的な知性、自由主義的なものの見方が必要であり、これを育成する教育において強調すべきものは、独断の体系や一群の確固たる知識の伝達ではなく、科学的な研究の方法と態度なのである。Russell は、人間にとって可能な限り非個人的で独断的でない観察と推理に人々の抱く信念を基づかせるように主張してやまないのである。科学的な知性の重要性を叫ぶ Russell 自身、自己の見解について独断的な確実性を要求しない知性の人だったのである。Alan Wood とともに、Russell を「情熱的な懐疑論者」と言うことができるだろう。⁽⁶⁶⁾

しかし、だからこそ、「おそらく Lord Russell が人類に対して与えた最大の贈り物は、ヒューマニティを守るためのキャンペーンで彼が保持した断固とした勇気と何ものをも恐れぬ抵抗であった。」(R. E. Egner)⁽⁶⁷⁾ と言えるだろう。「情熱的な懐疑論者」Russell にとって、疑うことのできない「支配的な価値は、常に『自由』であった。彼の社会的な政策は、すべて個人々々の自由に対する圧倒的な信念から由来し、この信念によって説明できる。」⁽⁶⁸⁾ と Eduard C. Lindeman も述べている。Russell 自身、「私たちにとって偉大な社会とは、人間として可能である限り幸福で、自由で、創造的である個人から構成されている社会である。……国家は、私たちにとって一つの便宜手段であって、崇拜の対象ではない。」⁽⁶⁹⁾ と書いているが、明らかに Russell にとって、個人の自由と創造性こそ、何にもまして掛け替えのない最高の価値なのである。

「人類そのものは、はっきりとしないその始源から未知の終末にいたるまで、ただ宇宙の生命における些細な挿話にしかすぎない。」⁽⁷⁰⁾ 「宇宙は宏大であり、人々は無意味な遊星のうへのほんの小さな点にしかすぎない。しかし、私たちが宇宙の諸力に面して自分たちの些細さや無力さを悟れば悟るほど、ますます人間が達成してきたことが驚異となるであろう。」⁽⁷¹⁾

人間が達成してきたことは、実に個人の自由と創造性に基づくものである。個人の自由と創造性の無条件的な尊重こそ、Russell の政治思想の基調に横たわる至上の命法にほかならないといえよう。

<注>

- (1) Paul Arthur Schilpp(ed.): The Philosophy of Bertrand Russell (1944) p.561 “Russell’s Concise Social Philosophy” における Eduard C. Lindeman の評言。
- (2) Alan Wood : Bertrand Russell — The Passionate Sceptic (1963) p.12
- (3) 仏教大学人文学論集第6号(昭和47年9月)所収「B. ラッセルの倫理思想」
- (4) B. Russell : Human Society in Ethics and Politics (1954) Part One : Ethics については、拙論「B. ラッセルの倫理思想」において取り扱った。
- (5) B. Russell : Human Society, p.159
- (6), (7), (8) Ibid., p.161
- (9), (10) Ibid., p.162
- (11) Ibid., p.163
- (12) Ibid., p.166
- (13), (14) Ibid., p.167
- (15), (16) Ibid., p.168
- (17), (18) Ibid., p.169
- (19), (20), (21) Ibid., p.170
- (22), (23) Ibid., p.172
- (24) Ibid., pp.172~174
- (25) Ibid., p.174
- (26) Ibid., p.158
- (27) Ibid., p.176
- (28) Ibid., p.178
- (29) Ibid., p.187
- (30) Ibid., p.215
- (31) Ibid., pp.215~216
- (32) Ibid., p.220
- (33), (34) Ibid., p.211
- (35) Ibid., p.212
- (36) Ibid., p.236
- (37) Ibid., p.233
- (38) Ibid., p.220
- (39) B. Russell : Unpopular Essays, (1950) p.27 本書に収められる以前に “Philosophy and Politics” は Cambridge, National Book League で1947年公刊されている。
- (40) Ibid., p.29
- (41) Ibid., pp.29~30
- (42) Ibid., pp.33~34
- (43) B. Russell : Education and the Social Order, p.137
- (44) Ibid., p.143
- (45) Ibid., p.137
- (46) B. Russell : Principles of Social Reconstruction, p.101
- (47), (48) Ibid., p.107
- (49) Ibid., p.108

B. ラッセルの政治思想

- 50 Ibid., p.115
- 51 Ibid., pp.115~116
- 52 Ibid., p.116
- 53 前記の拙論「B. ラッセルの倫理思想」(仏教大学人文学論集第6号 p.22)
- 54 B. Russell : Political Ideals, pp.9~10
- 55 Ibid., p.10
- 56 Ibid., p.12
- 57 Ibid., p.14
- 58 Ibid., pp.18~19
- 59 Ibid., p.19
- 60 Ibid., p.24
- 61 Ibid., p.27
- 62 Robert E. Egner : Bertrand Russell's Best, (1958) p.15
- 63 Robert E. Egner and Lester E. Denonn(ed.): The Basic Writings of Bertrand Russell (1962) p.444
- 64 Robert E. Egner (ed.) : Bertrand Russell's Best, p.11
- 65 Ibid., p.9
- 66 Alan Wood : Bertrand Russell — The Passionate Sceptic (1963)
- 67 R.E. Egner(ed.): op. cit. p.12
- 68 P.A. Schilpp (ed.) op. cit. p.559
- 69 B. Russell : If We are to Survive this Dark Time (1950) (R.E. Egner and L.E. Denonn (ed.) op. cit. p.683)
- 70 Ibid., pp.685~686
- 71 Ibid., p.687

——1973年7月19日脱稿——

